經濟論叢

第110巻　第5号

哀　　辞
故松井　清教授遺影および原稿

産業コンツェルン……堀　江　英　一　1
創業利得と利益留保……高　寺　貞　男　27
不生産的階級と生存競争の組織化……池　上　　惇　41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成……小　野　秀　生　57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格……成　瀬　龍　夫　78

記　　事
松井教授逝く
追悼講演（吉信 肅・森下二次也・山岡亮一）
追　憶　談（田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明）
故松井 清教授略歴・著作目録

昭和47年11月

京都大學經濟學會

追悼講演

松井清教授の学問を偲んで

吉信　肅

私は昭和24年京都大学経済学部に入学して以来ずっと松井清先生の近くにあって，その御指導を学問にかぎらずいろいろと受けてきたものであります。本日の追悼講演をお引き受け致しましたのも，そうせずにはいられなかったその学恩の深さを感じたからでありまして，私がそれをするのにふさわしいからでは決してありません。

松井先生は，その学問的生活の全体を通じて，終始一貫してマルクス経済学の創造的発展ということに，努力されてこられました。そしてそれは，今や大きな遺産となってわれわれの前に横たわっているのであります。先生の立ち向われた学問的分野は，外国貿易，世界市場というマルクス自身が未完成のまま後に残し，その後のマルクス経済学においてもなお十分に開拓されることのなかった分野でありました。先生はこの至難の分野に営々と分析の鍬を入れられると同時に，これと連関する商業経済学の研究にもたずさわってこられました。むしろ初期の研究は，後者の方に重点が置かれていました。後者については，このあとで森下先生からお話もあると思いますので，私は松井先生が一生を通じて主力を注がれたと考えられる前者の分野における先生の学問を，ここでふりかえってみたいと思います。

先生の学問的生活は，おおよそ三つの時期に分けることができます。先生が始めて経済学の研究に着手されたのは，先生自身が後に書いておられますように，1929年4月，いわゆる「4・16弾圧事件」を契機としてでありまして，当時先生は旧制第三高等学校の二年生でありました。こうして，天皇制ファシズムの波が高まりつつある中で経済学に興味を持たれ，滝川事件直後の1934年に京都帝国大学経済学部を御卒業，同時に学者としての生活に入られたわけであります。それ以来，敗戦後1947年5月，戦地より復員されるまでが第一の時期でありますが，この間には二度にわたる召集のため，7年に近い年月が学究生活からうばわれております。もっとも，先生はこのうばわれた不幸な期間について，「フィリッピン，パラオ，ニューブリテン，ソロモン，仏印，シャム，マライ，ビルマ，インド等々の国々を一兵卒として歩き廻ったわたくしの体験は，研究それ自身にとっても，必ずしも全面的にマイナスであったとは，思えない」(『世界経済学批判』，有斐閣，1948年，1頁）と述懐されておられます。

この時期における先生の学問的業績は，『貿易理論の研究』（有斐閣，1938年）と『国

際貿易政策思想史』(有斐閣, 1941年)の二つの著作およびハーバラー『国際貿易論』(有斐閣, 1937年)の翻訳によって代表されています。『貿易理論の研究』は, 先生26歳の時の処女作でありますが, 先生のその後の研究の土台となったものということができるでありましょう。それは, 貿易理論の理論史という形をとっていますが, 貿易理論の前提に始まり, 比較生産費説, 国際価値論, 資本移動論そして貿易の貨幣理論と, 後年の理論体系の過半をすでに包含しております。ここからも分りますように, この著作は一つの体系的な研究であると同時に, そこには貿易理論の現代的課題の追求が究極の目標としておかれていたのでありました。しかしながら, それはいわゆる正統派経済学に対する批判的見地によって貫かれていたとはいえ, 先生の積極的見解はなお十分には展開されていたとはいえません。それは, この書の第2版およびそれとほぼ時を同じくして出版された姉妹編『国際貿易政策思想史』においてより明瞭に展開され, そして次の時期の先生の学問へと受けつがれていくのです。

第二の時期は, 復員後京都大学経済学部にもどられてから1954年12月イギリス, ドイツへ留学されるまでであり, 先生の学問の確立期であります。この7年半の期間に単行本だけで9冊の著書が出されていることからも分りますように, 精神的にも体力的にももっとも盛んであった時期ということができると思います。

復員後先生がまず直面された事態は, アメリカによる日本占領初期の非軍事化政策から, アジアの反共拠点として日本を建てなおす政策への転換に伴う部分的民間貿易再開という現実問題でありました。研究室にもどられていくばくもなくして最初に書かれました論文は, 『貿易理論の研究』を土台にしたもので「国際価値論について」(「経済論叢」, 第61巻, 第3号, 1947年9月)と題されておりますが, 問題意識はこうした現実との関連で理論を鍛えていこうという点にありました。先生は, この論文の中で, 次のように書いておられます。「この問題は現実の問題に連っている。最近民間貿易の再開という事実に当面して, 資本主義と外国貿易の問題が色々の視角からとり上げられているがそれらの議論に共通する考え方は, 資本主義が外国貿易を必要とする仕方は, 論理的なものではなくして歴史的なものであるとの見解である。わたくしもその点に関しては異論がない。しかしその場合価値論の立場から問題が如何に取扱われねばならぬかについて, はっきりした考えをもたねばならぬであろう」(同上, 1頁)。先生の研究態度は常にかくの如きものでありまして, 理論を机上の空論たらしめることなく, 現実とのかかわりあいにおいて把握し発展させるというのが先生の基本的姿勢でありました。先生のこの論文は, 世界市場を平坦なものとしては見ずに, 個々の国を構成部分とする複合体として見た場合, そこにいかに価値法則が貫いていくかというこの問題の進むべき正しい基盤を指示したものであり, 名和統一先生の「国際価値論——国際貿易における不等

価交換の問題——」(「経済思潮」, 第7集, 1948年4月) と並んで, いわゆる国際価値論争の出発点となったものであります。こうして始まったこの論争のうちに現実的問題意識から乖離するような傾向が後に現われてまいりますと, 当然にも先生は, 「最近の国際価値論争を観察しようとする場合, 論争の背後にある……現実を絶えず問題意識としてもっておらないと, 論争は単なる閑人の理論遊戯に堕するおそれなしとしない」(「国際価値論争について」, 「世界経済」, 第5巻, 第2号, 1950年2月, 木下悦二編, 『論争・国際価値論』, 弘文堂, 1960年, 所収, 213頁) といましめたのでした。そういうことでありますから, 先生の研究自体, 理論と現実分析という二つのものが一本の縄のように互いにからみあって, 進行していっております。

国際価値論と並んで, 日本に帰られたばかりの先生の強い関心をひいていた問題は, 日本資本主義と外国貿易との関係をめぐる問題でありました。これは, 「日本資本主義における外国市場の問題」(「評論」, 1948年6月号), 「戦後外国市場と日本経済」(「経済評論」, 1948年8月号) などの論文となって現われております。これらの論文を通じて先生は, 当時の「市場論争」に貴重な一石を投ずるとともに, 明治以来戦前の日本資本主義が一方における先進諸国に対する「植民地型」, 他方における後進諸国に対する極端ともいえる「掠奪型」といった構造に示されるような外国市場依存体制をとってきたこと, そして戦後の日本がアメリカ占領下での部分的民間貿易再開に当って, 旧来の構造を一部変更しながらも再び同様な形を復活しつつあることに警告を発し, こうした方向にではなく, これまで国内市場の深化を妨げてきた諸原因を一つ一つ排除すること, すなわち民主革命を執拗に遂行することこそが世界平和を願う日本民族にとって第一に必要であり, 進むべき道であると, 説かれたのでした。

以上に見られるような理論と現実分析との両側面からの研究は, 第二の時期を通じて続けられており, 前者は『世界経済学批判』(有斐閣, 1948年), 『世界経済学』(三笠書房, 1950年), そして『世界経済学原理』(日本評論新社, 1954年) とたゆみなく拡充, 発展させられております。後者は『資本主義の一般的危機』(三一書房, 1950年) から『日本貿易論』(有斐閣, 1950年) へと高められ, さらに啓蒙的な『日本の貿易』(岩波新書, 1954年), 編書としての『日本貿易読本』(東洋経済新報社, 1955年8月, 留学中出版) に及んでおります。

先生が学位をえられました『世界経済学批判』は, 先生の著書の名前に世界経済なる名称が使われた最初のものであります。すでに述べましたように, 『貿易理論の研究』はたんに貿易問題に止まらない問題領域を含んでいたわけで, 批判的見地の明確化と体系的充実に伴い, この書にいたって名前と内容とが相応したものになったともいえるのであります。しかし, この書においては世界経済学の方法論はハルムスなどのブルジョ

ア経済学批判としては述べられていますものの，マルクスの「経済学批判体系プラン」に示されているような方法論が意識的に取り上げられるまでにはなっていません。それは『世界経済学』において始めて現われ，『世界経済学原理』において確固不動の方法論として確立されるのであります。これは当時盛んになりつつあった「プラン問題」論争とも直接関係ある問題でありました。先生は現実を解明する経済学の任務からいって，基本的にマルクスの「プラン」は最後まで生きており，またそれに従った理論の具体化が必要であるという態度を堅持されました。『世界経済学原理』の序文において先生は，「この仕事の主たるねらいは，国際経済，世界経済とよばれるものを理論的に体系づけることである。新しい理論経済学はどうしてもこの仕事を果さなければならない」(同上1頁）とその執念のほどを吐露されています。

こうして，この時期に『世界経済学原理』および『日本貿易論』という二つの主要著作において，先生は自己の学問的体系を確立されたということができるのであります。

第三の時期は，1955年11月ヨーロッパ留学から帰られてのちでありますが，この時期にはそのほか四度にわたる外地出張が含まれております。この時期は，これらの経験や新たな問題意識をふまえて，これまでの，とりわけ第二の時期に確立された先生の学問がさらに多様な形で進展する時期であり，これは亡くなられるまで続くのであります。またこの時期の特徴として，先生を頂点とする松井研究室の共同研究体制が大きく発展し，7冊に上る編著——これは増補・改訂版や共同編著を除いた数でありますが——が出版されております。口さがない他の研究室の人たちは，こうした事態を見て，松井工場，松井マニュファクチュアと評したものでありました。

新たに開拓されていかれました方向の第一は，低開発国経済にかんする問題であり，これは留学から帰られてまもなく組織された研究会で取上げられたテーマでありました。第二次大戦後の帝国主義の植民地体制の崩壊過程は，50年代を通じて近代経済学に新たなイデオロギー的対応を生ぜしめたのですが，当時これに対する批判はまだ十分には行なわれていなかったのです。『後進国開発理論の研究』(有斐閣，1957年）は，こうした必要に応じた水準の高い共同研究の成果でありました。先生はこの研究会において，戦時中の南方での経験をしばしば語られて，植民地支配の悲惨な結果を具体的に指摘されたのでした。そして先生は，この研究会での成果をさらに発展させ，パキスタン，中国などへの二度の出張の経験を加えられまして，『低開発国経済論』(有信堂，1967年）をまとめられました。

第二は，社会主義世界経済にかんする問題であります。ヨーロッパ留学中先生は，東ベルリンで東独の有名な経済学者グンター・コールマイ教授と会われ，その著書『民主主義世界市場』(*Der Demokratische Weltmarkt*, Berlin, 1955）の寄贈を受けておられ

ますが，社会主義世界経済に対する研究は，それ以来先生の脳裏を離れないものの一つとなり，帰国後まずそれは，コールマイ教授の著書の翻訳となって現われました。これはコールマイ教授の希望により，『社会主義世界市場』（日本評論新社，1957年）と名前を変えて出版されました。先生の世界経済に対する把握は，コールマイ教授の社会主義体制側からする体系的な叙述を通じて，ますます強固なものとなっていったようであります。これと並んで，東西貿易の問題も先生が関心をいだかれた理論問題でありました。先生は資本主義でも社会主義でもない第三の経済法則などというものは存在しないのであって，これは資本主義から社会主義へ移行する過渡期の法則の一つとして考えられなければならないとされたのでした。

第三は，著書『日本貿易論』を一層精密化し，とくに経済発展と外国貿易との関係を明らかにするという「市場論争」の延長線上における新しい問題意識からの日本貿易史の研究でありました。これは共同研究の形で推し進められ，先生の編著として『近代日本貿易史』全3巻（有斐閣，1959年—1963年）となって残されております。日本学術会議の推薦により1961年度「毎日学術奨励金」が，これに対して贈与されました。

第四は，労働者階級そして広範な人民の立場で，それらの人々が要求するもっとも現実的なその時々の経済問題を解明するという仕事でありました。先生はこれを数多くの論文によって果されたのでありますが，この場合も共同研究が大きな役割を演じたのでありました。それは当時ベスト・セラーの一つとなった『貿易・為替の自由化』（三一新書，1960年）をはじめ，『資本の自由化』（有信堂，1970年），『現代資本主義と国際通貨』（法律文化社，1970年）の3冊の編著となって現われております。また，著書の『戦後の世界経済』（日本評論社，1969年）は，ある意味でこうした時論の集大成ともいうべきものでありましょう。

第五は，啓蒙活動でありました。先生は労働学校での講義や各種の講演でこれを行なうとともに，これまでの著書を入門者向きに書き変えるという仕事をなさいました。『貿易論入門』（白桃書房，1959年），『日本貿易入門』（岩波新書，1962年），『世界経済入門』（有斐閣，1965年）がそれであります。最後の『世界経済入門』は，お亡くなりになる2日前に，その改訂版のための原稿を出版社にお渡しになったのでありました。

以上は，この最後の時期における松井先生の多様な学問活動を整理してみたのでありますが，やはりこの時期におきましても先生は，これらと並行して，否，これらと結びつけてその主著を鍵刻するのに余念がありませんでした。その結果，『世界経済学原理』は，『世界経済論体系』（日本評論新社，1963年）と名前が変えられることになりましたが，先生は同じ対象をあくことなく追求しつづけてこられたのであります。今年2月に出版され，多年にわたって先生の仕事を側面から支えられてきた澄子夫人に捧げられて

いるこの書の改訂版のまえがきには，「わたくしの経済学の研究歴は40年以上にのぼる。その間かなり多くの著書や論文を発表したけれども，わたくしの研究の中心は，この『改訂・世界経済論体系』にいたるものであったといえよう」（同上，i頁）と先生は書かれておられます。それにつけても，わたくしたちの胸に強くきざみこまれているのは，先生がこの困難な仕事を開拓されていく上で，研究者としてきわめて立派な人間的態度を示されたことであります。先生はまず，他人の功績を認めるのにきわめて公平卒直でありました。また自説を主張するのに正しい批判を歓迎こそすれ，恐れることはありませんでした。さらに，誤まりを訂正するのに悪びれることなく謙虚でありました。先生はこの改訂版の前には，次のようにいっておられます。「この仕事には欠陥が多く，内容の乏しいものであることは，わたくし自身よく承知している。しかしそれはわたくし自身が，欠陥の多く，内容の乏しい人間であることの当然の結果であり，今後勉強して，少しずつでも欠陥を少なくし，内容を豊富にしてゆく以外に方法はないと思っている。同学の人々の好意ある御教示をまちたい」（同上，ii頁）と。しかしもう，この『世界経済論体系』は，永久に再び改訂されることはないのであります。

けれども先生のお教へを受けた多くの後輩が，マルクスの方法論と先生の学問を導きの糸として，いくつものそして様々なそれを作り出していくでありましょう。また，先生の学問を学んだ労働者，農民，学生など広汎な人民が，世界を変えることに立上っていくでありましょう。

先生，安らかにお眠り下さい。